

## 「下妻第一高等学校校歌」



『筑波山』 56回卒 飯泉俊夫先生

「『東に聳ゆる筑波嶺を……。』と、肩を組みあって朗唱した記憶が懐かしい。この校歌を共に歌うと、本校の卒業生は初めての出会いでも旧知の仲のごとく心が通うのだから不思議である。」(記念誌「為桜百十年」より)

本校校歌の誕生については、異説があると言われるものの、10回卒の菊地暁男氏(故人)と外池格次郎氏(故人)の両人が、5年在学中の明治43年(1910年)に、旧制第一高等学校の寮

歌の一つである「嗚呼 玉杯に花受けて」のメロディーにのせて詩を合作し、郷土の詩人「横瀬夜雨氏(故人)」が筆を加えたものと言われています。

一方、難解な歌詞の意味については、元本校国語科教諭(昭和15年～43年)で29回卒「戸恒恒男先生(故人)」が、昭和40年発刊の為桜新聞506号・507号にその解釈を「校歌自釈」として、寄稿されているので、ここに紹介いたします。

### 【校歌自釈(一) 戸恒恒男 為桜新聞506号】

どうしたわけか、校歌が一・三・五節だけしか歌われなくなって久しい間であった。校歌は一・二・三・四・五節あるので、その中三節をとびとびに歌ったのでは意味が切断されてしまう。

やっと去る三月に全部歌って立派な卒業式を成し得た。五月十二日の対海高定期戦には、この栄誉ある校歌は全章高らかに幾度も幾度も高唱されて、優勝旗奪還の偉業を成し遂げたのであった。これを機会に校歌の意味を講じて欲しいと編集子が依頼に来た。一応引き受けて考えて見ると、私自身が生徒時代に校歌の解釈を聴いたことが無かった。唯その優麗な詞句に酔って高唱放吟したのであった。

母校を巣立って三十五年、母校在任二十五年の今になって、校歌の意味を考えるのも一入の感慨を覚えるものである。

さて、この校歌が何時、何人の手に成ったものかということは、沿革誌に譲ってここには割愛し、直ぐ解釈に移ろう。校歌は全編五章、一章が三節、七五調のリズムを踏む。

一、東に聳ゆる筑波嶺を 心の友と仰ぎつつ  
関八州の唯中に 花散り月はうつろへど  
為桜の園は牢として 千百健児の意気高し

「関八州」関東の八つの国即ち相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野である。本校は常陸国所在で、関八州の唯中に位置するといふのである。

「うつろへど」「うつろふ」即ち「移る」こと。「牢として」は堅固なこと、しっかりと、ゆるぐことのないこと。筆者の頃は「七百健児」であった。

（歌意）東の空に高く聳え立つ筑波山を心の友と仰ぎながら（この一節は三節へ結びついていく）関八州の真中に本校は位置し、花は散り、月に移るけれども（歳月は経過しても）、為桜の学園は不動の堅固さをもって、ここに学ぶ千百の健児の意気は素晴らしいのである。

心の友——万葉集巻二十防人歌

吾が面の忘れも時は筑波嶺を

ふり放け見つつ 妹はしぬはね

筑波山に精神移入の意。筑波嶺を心の友と仰ぐ処に郷土に密着する精神像が清々しく、本校教育の基本もそこにあるかと考えられる。

## 二、花爛漫の曙を

月寂寥の夕暮に

白星ゆらぐ多賀谷趾の

学びの窓にいそしみて

質朴剛毅の校風を

天下に示す雄々しさよ

「花」とはすべて桜花である。「曙」は夜明方、枕草子に「春は曙」とある。「寂寥」はものさびしい様。「白星」は、はっきりと輝く星のこと、例、「白日」「ゆらぐ」は動く程の意、「多賀谷趾」本校はその昔の多賀谷氏居城の趾に建てられた、由緒の地である。「質朴剛毅」表は質素にして飾らず、内に剛毅の精神を宿す、正に伝統の校風である。本校の綱領に「誠実、剛健、進取」とある。

（歌意）春、桜花らんまん咲く明け方、秋、月影ものさびしい夕暮れ時、明星輝きつつ移りゆく多賀谷城趾のこの本校にひたすら学問の道にいそしんで、質朴剛毅の校風を、天下に示すことの何と雄々しいことよ。

この第二章は土地も史的に由緒深い学舎に春や秋とめぐりくる風物の中に、学究一筋に学徒らが、天下にあえて実力を問うという、誠に意気の高い内容を示したものである。詞句もまことにうるわしく、愛唱禁じ能わざる所であろう。諸君も実際に桜花のもと、あるいは月光皓々たる折、この第二章を高吟して見給え。諸君の胸はゆえ知らぬ熱きものに満たされてくるにちがいあるまい。（未完）

## 【校歌自釈(二) 戸恒恒男 為桜新聞五〇七号】

この校歌自釈の（一）は生徒諸子が喜んで読んでくれたといふので、筆も軽く第二回目を書くこととした。

## 三、人あり我等が胸問はば

かくと答へん桜花

動かぬ雲と靡く時

御代の姿と昇り行く

朝日の影に色添えて

春永へに誇りあり

この三番の歌詞はやや難解でよく質問されるのだが、「桜花」以下が「かくと答へん」の答となっている。と考えるべきであろう。「動かぬ雲と」の「と」「御代の姿と」の「と」は同意の助詞で、「のように」「その如く」の意である。

（歌意）人ここにあって我等の胸中を問うたならばこのように答えよう。桜花が動かぬ雲のようにたなびき咲く時、御代の姿そのものの如く昇天する朝日の光に一段の光彩を添えて、永遠の春をそこにたたえるもので、我等もこの泰平隆昌の御代に爛漫たる桜花を青春の永遠不滅の信念とし、誇りとするものである。

**四、 学べる力身にこめて 山なす浪を分け行かん**  
**六大洲は我が天地 飛躍をここに試みん**  
**為桜の旗のさす所 光を宇内にかがやかせ**

この第四章に至って俄然歌境は大きく展開した。一、二章に郷土や学内を歌い、三章で聖代の隆昌と胸奥を語って、いよいよ世界にその覇を競うべきだとうたいあげるのである。

（歌意）学力いよいよ充実したからには、山なす浪しあらゆる困難を克服して前進しよう。六大洲即ち世界こそわが飛躍を試みむべき所である。単に祖国日本内にせせこましくあるべきではない。為桜の旗を燦然とはためかしながら、宇内（天地の間・世界）にその光を輝かそうというのである。実に強大な精神力を謳歌したものである。この第四章をとばして歌って今までは平気でいたのである。この章は現時点において時代錯誤は毫も無く、その積極進取の気象はいよいよもって発揚し、世界を活舞台として、全人類の為にその役割を果たすべきであろう。

**五、 昔男子は眉上げて 天下に敵すと誇りけり**  
**山の黙姿は今もなほ その世ながらに語らずや**  
**立てや筑麓健男児 漲る雄図示すべし**

終章は別にむずかしい所はあるまい。「山」は言うまでもなく筑波の山である。ここには輝く伝統のもと為桜健児の一大奮起をうながしているのである。

（歌意）昔、為桜健児は昂然と眉あげて天下無敵を呼号したのであった。紫峰筑波は今もなおその昔を無言のうちに語っているではないか。山はすべて知っていて、輝かしい伝統を語っているのだ。筑波嶺を心の友として仰ぐ意味はここに存するのである。為桜健児と言わないのである。為桜健児と言わないで「筑麓健男児」と言っているのはこの意味からである。さあ、立てよ。そして、みなぎりあふれる大きい志を天下に示せよというのである。昔からの伝統を背負い、前途に光明を望んで、その覇気を堂々と顕示してひたすらに前進すべしというのである。

以上、全五章の解義を終ったのであるが、校歌全部を通して強調されて、琴線につよく触れてくるものは、進取敢為のすばらしい飛躍的精神である。この精神は、時代を貫いて不動のものであり、本校の教育精神であるのだ。保守退嬰はわれの採らざるところである。そして、全章にちりばめられた華麗な詞句は、こころゆくまで朗々吟誦するに価するもので、まこと名歌の名にそむかない。曲がど

うしたこうしたという文句は聞くが、謳いつがれて七十年の星霜を閲しこの校歌を通して、卒業生らはその魂を母校と繋ぐのである。歌わんかな校歌を、高らかに歌わんかなこの校歌を、青春のかたみをこの校歌にたくして、限りなき愛情を為桜の学園にそそごうではないか。(完)

### 【追記】

第五章「昔男子は眉上げて天下に敵す」と誇った「男子」とは誰か。

元本校社会科教諭で三十八回卒の中村貞夫氏(故人)は、為桜新聞第五一六号の「寄稿」の中で、戸恒恒男先生の校歌自釈について、全章にわたる優れた解釈と評している。しかし一方、第五章の「男子」については、戸恒先生が解釈した「昔為桜建児は昂然と眉を上げて天下無敵と呼号した」のではなく、郷土の英雄「平将門」が「承平・天慶の時代、律令政府に昂然と真っ向から対決した」という史実から、「男子」とは「平将門」ではないかと解釈しても不自然ではないと記している。



### 【校歌の制定】

校歌の歌詞の作者については、はっきりとした記録がなく、又色々な異説もあって、俄かに断定し得ない。第 10 回卒業の故外池格次郎氏の回想録「長塚節と横瀬夜雨と中学生と」によると「今下妻中学校の校歌は、自分が中学 5 年の時(明治 43 年)、先に書いた菊地楓葉(その当時、下野新聞に小説を書いていた菊地という男<注、菊地暁男故人>が自分の組に転校して来た。無論年令も 20 を過ぎていた大人である。楓葉と号して小栗風葉の崇拜者であった。)との合作を、横瀬(夜雨)さんが筆を入れたものである。関係者として残るのは自分のみになって、あの校歌も譜も一高式、歌の様式も同様で、ひどく気がさす」とあり、一方菊地暁男の回想録「下妻印象記」(明治 44 年 5 月 25 日発行「為桜」63 号)の中にも「自分は外池君と 2 人で校歌を作った。10 余年の長い歴史を有った桜校の校歌を。一日の課業に疲れ果てて寄宿に帰らうとする時、又は夜が更けて青白い月の校庭などを歩いてみると『花爛漫の曙を……』を歌はれると何とも言へぬ嬉しさが湧いた。こんな時自分はそっと合唱して微笑むた。あの時の心地は永遠に忘れることが出来ないだらう」とあるので、一応は第 10 回卒業の外池格次郎氏と菊地暁男氏の合作に横瀬夜雨が加筆し、それを一高寮歌の曲でもって歌ったものと解釈されるが、これに対する異説もあるので断定しかねる現状である。諸説を総合して言えることは、少なくとも歌詞の原文はこの頃の在校生の手によって作られたものであり、それが誰かは断定出来ないにしても、その生徒の原作に国語担当の橋詰孝一郎教諭が助言し、更に橋詰教諭を通じて横瀬夜雨が何らかの筆を加えたものであらうと推察されるということである。

(沿革史草案より)